



教員資質豊かな栄養教諭を育てたい ～「教職実践演習」を通して～

健康栄養学部 松田 素行



山形県出身。千葉大学教育学部を卒業後、千葉県公立中学校に数学科教員として勤務。在職中に生徒指導への関心が高まり、大学院で生徒指導を研究する。以来、教育行政職（国、県、市）、中学校校長、短期大学教授を経て、平成23年に文教大学に着任。教職課程を担当している。現在、いじめのメカニズムと学校・行政が行ういじめ対策施策の研究を主としながら、小中一貫教育、特別活動、学校経営などの研究に取り組んでいる。（まつだ もとゆき）

栄養教諭は、平成17年の制度施行以来ずいぶんの年月を積み重ねているが、実態として栄養職員の延長認識が根強く、教員としての認知度は低いという実感がある。本学の栄養教諭養成課程では、「実践力を備えた教員」として、専門的事項に係る指導力はもとより、使命感、責任感、企画力、生徒指導力、社会力を備えた栄養教諭の育成を目指している。

1. 授業に臨む

私が、授業計画立案にあたって必ず確認することが、当該科目が講義なのか、演習なのかということである。

大学によっては、45時間の学修を前提に、15時間の授業をもって1単位とする授業を講義、30時間の授業をもってあたるのが演習と定義しているところがある。本学の学則には「授業は、講義、演習、実験、実習若しくは実技のいずれかにより又はこれらの併用により行う」（文教大学学則第9条）、「講義及び演習については、15時間から30時間までの範囲で本学が定める時間の授業をもって1単位とする。」（同第16条）と示される。

本学では、学部・学科のカリキュラムに示される単位数に含められる意味を深く考え、その意に沿った教員の主体的な授業が展開されるよう期待が含まれているといえる。これを踏まえ、私は、「講義とは義を講ずること。

教員が学問の一端を学生に開陳することができるもの」、「演習は、教員の指導のもとに、学生が実地や発表、討議などを通して主体的に学習するもの」と定義して臨んでいる。

ここでは、教職実践演習（2単位）の授業の一端を紹介し、批評を仰ぎたい。

2. 科目設定の主旨と指導態勢を確認する

当該科目の設定の主旨の一つに、「教員になるための自己課題を自覚し、伸ばすべきところはより伸ばし、不足している知識や技能等は補う」ことがあることを確認する。

「教職実践演習（栄養教諭）」は、この点に立脚したものであるとともに、演習であることを勘案して学生の主体的な取組を是とするものと位置付けた。それを支えるため、担当には、①栄養教育、②食教育、③学校教育を専門とする三人の教員を配している。この中に私も含まれる。

3. 実践する

当該科目は、栄養教育実習が終了していることを前提としているので、まず、「教育実習を終えて、自覚した自分の課題」をまとめることから始まる。その後、当該学生と三教員とで対面確認を繰り返すことで、学生自身が、課題の本質に迫る対策を練り続けることができるようにすることを狙う。

学生三人（A,B,C）が次表のような課題を寄せた。

（表）教育実習を終えて自覚した自分の課題

学生A	言い回しが下手，言葉足らず，文章力のなさ，直感で動く癖，がはっきりした。
学生B	今後もより多くの人と関わり，より多くの学び・経験の機会を得て，人間力を高めて自分の心の幅を広く深く持ちたい。
学生C	教育実習を通して，食の知識が不十分だと児童に教えることは出来ないと感じ，また，自分自身には児童に分かりやすく伝える力が不足していると感じた。

科目担当の教員三人により指導方針を協議した結果、学生三人が共同して取り組むことを推奨することにした。これを受け、三人の学生は幾度となく話し合い、「多様な考えの中で、『伝える力』を身につける」という課題を設定し、「叱り方」をテーマにロールプレイ・ディスカッションを行うことを決めたものである。その企画が図である。

1	テーマ 児童への叱り方
2	目的 臨機応変な対応が必要とされる教師は、言葉一つにも気を利かせなければならない。児童を叱らなければならない時、どんな対応をとるか、学生同士で意見交換をする。
3	方法 ①叱らなければならない場面をA,B,Cが劇で演ずる。（シナリオ：5分） ②教師としてどのような対応をとるか、学生各自が考える。 ③各自が考えた対応案を演ずる（発表する）。 ④発表後、自分の発表に対する反省や、他者の対応に関する感想を述べる。（ディスカッション） ⑤ディスカッションをもとに3人で考え、次の授業時間に再演する。

（図）「相手の意見を聞く」（企画）

「叱る」行為に含まれる「伝える」ことに焦点を当て、図らずも叱る側と叱られる側の心の動きに考え及んだディスカッションを終え、主催した学生は述べている。

（学生A）

実習後に自覚した自分の課題は、今回のグループディスカッションでも改めて自覚させられた。相手の心の動きを考えて行動する癖を身につけようと心から思った。教職実践演習は、自分の弱点と長所を見つめる良い機会となった。

（学生B）

第三者とともに実践するためには、あらゆる事柄を想定し、多くの視点から客観的にその内容を捉えることが重要で、その難しさ、大変さを痛感した。

（学生C）

様々な観点から意見が出て、テーマから離れてしまった反省はあるが、自分では考えることができない意見を聞くことができ、叱り方についての視野を広げることができた。

4. 授業の理念を貫くために

演習と名のつく科目が、科目設置の趣旨に沿った授業となるためには、学生の主体性を尊重しながら、いかに学生の良い自己概念を育むかという点に視点があると確信している。

私がこの授業に係る勝手な理念を示すと、①反省に基づき学生自身が課題を見つけられること、②多様な示唆を可能にする教員（チーム）の助言が有効であること、③他者の協力を得られる場があること、④自己変革の認識（良い自己概念）を持つことができること、である。演習科目において演習本来の成果を生むために、今後とも、当該科目におけるこの指導方針を踏襲していくつもりである。

しかし、昨年度末の授業評価において、「先生の授業熱意が足りない」との苦言をもらった。授業理念を貫くためには、学生の実態に適った指導方法を不断に模索する必要があることを痛感した。教職実践演習の授業実践から学んだ自分の課題である。